9/26 朝日

街に叫び 再燃

シールズ関西

法成立後も「憲法守る」

安全保障関連法案への反対運動を展開してきた学生らのグループ「SEALDs（シールズ） KANSAI（自由と民主主義のための関西学生緊急行動）」が25日、法成立後、改めて街頭に立った。組織ではない「個人の集まり」を掲げ、既存政党や団体と一線を画す運動は、これから何を訴えていくのか。視線は、やがて来る選挙へも向いている。

安保関連法成立後、初めて開かれた「SEALDs KANSAI」の街頭活動に集まった人たち＝25日午後6時50分、大阪市北区のJR大阪駅前、橋本弦撮影

ウォッチ 安保国会

「安保法反対は行動のきっかけ。ここから民主主義を求める運動は盛り上がっていくんです」「この国の主権者は僕たちですよね」

25日午後6時半、JR大阪駅北側の路上。シールズ関西の学生らが訴えると、道路を挟んだ歩道に集まった聴衆から拍手がわいた。学生のほか、ゲストとしてスピーチしたのは大学教授、弁護士、そして野党共闘を模索する民主、共産の国会議員だ。

学生の一人は言った。

「私たちを利用したい人は甘いことを言ってくるし、疎ましく思う人はありもしないことでたたくでしょう。それでも私たちは一人一人、孤独に考え、判断し、行動する」

19日未明に安保法が成立。十数人の中心メンバーが翌20日、大阪市内の会議室に集まり、今後の活動について話し合った。7月から毎週金曜に関西各地で続けてきた街宣では安保法案への反対が旗印だった。これから街宣をするなら掲げるべきテーマは何だろう。

「何かに反対する、ってことじゃないよね」「ポジティブなものでないと」

議論の中で一人が言った。「そもそも私たちは目の前に危機があるからできた『緊急』の集まり。元のまんまでいいよ」。街宣のタイトルは、シールズの名前をそのままとった「自由と民主主義のための関西学生緊急行動」と決めた。

元々、安保法反対という枠にとどまらない「憲法を守る」という理念を掲げてきた。改憲派や護憲派、考えの違いがあっても憲法に基づいた手続きで政治を進める立憲主義の考えだ。中心メンバーの塩田潤さん(24)は「憲法違反とか、当たり前のルールすら破られる政治なら変えなきゃいけない」と話す。「こんな大変な活動、本当はない方がいいとみんな思ってる。いらないなら早くやめたいですよ」

「組織にしない」が大原則

シールズ関西ができたのは今年5月。集団的自衛権の行使容認など安全保障の大転換が議論される中、政策決定の過程を「強引だ」などと感じた学生ら十数人が、関東のSEALDsの動きに同調する形で知人と声を掛け合い、結成した。SNSを通じて広がり、現在、情報交換の場となるLINEには約140人が参加。ツイッターのフォロワーは約1万4千に上る。

当初はデモや街宣のやり方もわからず、インターネットで申請方法などを検索するメンバーもいた。週1回程度、中心メンバーが顔を合わせて話し合う場では「5限の授業あるから街宣に遅れる」「サークルの合宿でしばらく来られない」といった会話もしばしば。

大野至さん(23)は「運動に日常がのみ込まれないようにしようというのが僕らの大原則。運動していて単位を落とした、なんていうのはダサイですから」。

徹底されてきたのは「組織にしない」ことだ。特定のリーダーはおらず、決まった役職もない。活動資金は持ち出しとカンパ。活動に加わる理由も「特定秘密保護法に違和感を感じた」「原発事故で価値観が変わった」など様々だ。

主張が重なる政党や労働組合など既存の団体からの支援は拒否しない。一方、政治家にツーショットの写真撮影を頼まれても断ったり、街宣中に特定の団旗を掲げる人にやめるよう求めたりと一定の距離を置く。

次の活動の展開は――。

「来年、どんな活動をしているかわからないし、そこに私はいないかもしれない。リーダーという『誰か』に期待して運動はしないし、誰も頑張らなくていい。そんな一人一人の集まりだから、しなやかで強い」と、大澤茉実さん(21)は話す。

塩田さんは「次の参院選はとても大事」と言う。「どうアプローチするか決まっているわけではないですけれど」

次の参院選「とても大事」

（平井良和）

緩やか連帯 お任せ民主主義変えた 識者

「『デモ』とは何か」の著書がある五野井郁夫・高千穂大准教授(36)は13日、大阪市内であったシールズ関西などの抗議活動を見たという。「メンバーの一人が『民主主義が始まりましたよ』と声を上げていたのが印象的だった。自分で考え、物を申すという行動を通じ、社会をむしばんでいた『お任せ民主主義』を変えていった」と話す。

特徴的なのは「個」を保ちつつ緩やかに連帯していることだとみる。これまでの社会運動は、中心をつくることで派閥ができたり、覇権争いが起きたりし、運動体の中で疲弊してしまうことがあったという。

「特定のリーダーを設けないことで、特定の立場や声が権威化するのを防ぐ仕組みを意識的につくっている点が新しい。みんなが意見を言いやすくすることは運動を維持する上で現実的な戦略。一過性の運動ではなく、今後も広がっていくのではないか」

（沢木香織）